

2019年5月26日

福音書からのメッセージ

わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。

(ヨハネによる福音書 14 章 27 節)

今日の場面でイエス様は、ご自分が十字架につけられる直前に弟子たちに対して長いお別れの説教をします。しかし「別れ」というのは、正確ではないかもしれません。今日の箇所の中に、このようにあります。

「わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る」と言ったのをあなたがたは聞いた。

今から自分はあなたがたのもとを去る。しかし、いずれ帰ってくる。それまでの期間が短いのか、それとも長くなるのかはわからない。そのようにイエス様は、十字架が間近に迫ってくる中、弟子たちに対して語られたのです。

わたしは幼稚園の園長として、毎朝門に立っています。例年4月の新学期に、親御さんと離れる子どもたちの不安な表情をみると、胸が痛みます。「～時ごろには必ず迎えに来るから」。そのような言葉を掛けながら、後ろ髪を引かれるように去っていくお母さんがいます。その後ろからは、子どもの泣き叫ぶ声。

しかし日が経つにつれ、子どもたちの泣き声は少しずつおさまってきます。幼稚園や先生に慣れたというのもあるでしょう。でもそれよりも大きいのは、「必ず迎えが来る」ということが分かるからです。今は寂しい。でも絶対に会える。必ず会える。その確信があったときに、少しずつ涙は消えていくのです。

イエス様は、弟子たちのもとから自分が去った時に弟子たちがどうなってしまうのか、ご存知でした。言いようのない不安に駆られ、前を向いて歩くことができない。



怯え、逃げまどう弟子たちの姿。しかしその姿は、救いの確信を得ることのできないわたしたちの姿と重なって見えます。

だからイエス様は天に昇られる前、わたしたちに聖霊を与

えて下さったのです。その聖霊はイエス様がそばにいらなくても、思い起こさせてくれます。それは単に、「そうそう、イエス様ってこんなことしていたなあ」という思い出ではありません。イエス様がまるで今もいるかのように、わたしたちの周りで何かが起こる。それが聖霊の働きなのです。働きによって、わたしたちは気づかされます。「そうだ、イエス様と一緒にいてくれると約束してくれていたんだ」と。そして、きっといつか来てくださるということをも、わたしたちに対して知らせようとされているのです。

わたしたちは神さまの子どもです。それぞれの人生を歩んでいます。苦しいことも、悲しいこともあります。逆に楽しくて仕方がないこともあるでしょう。そのすべての出来事を、いつも支えてくれる存在があります。目には見えない。手に触れることもできない。でも確かに、聖霊はわたしたちに与えられているのです。

そして再びイエス様が来てくださるその時まで、わたしたちの涙をぬぐってくれます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>